

料理好きな妖刀使い

ibura

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界をぶらぶら旅していた少年は、その旅に飽きたのでアスタークスに行くことにしました。

趣味は料理、特技も料理、あとは呪われた刀を持っていることぐらいが特徴の少年。

——そんな少年の物語——

目
次

7	6	5	4	3	2	1	プロローグ
45	39	32	25	19	13	7	1

プロローグ

「死にたくないなら大人しくしてろよ」

ある日ある国のある銀行で、銀行強盗が店員と客を脅していた。

『お前達は包囲されている！ 抵抗はやめて人質を解放しろ！

その外では警察がテンプレのような対応をしている。

……本当にそれで解決すると分かっているのだろうか？

「うるせえ、こつちには人質がいんだよ!!

お前ちよつと来い』

強盗は人質のうちすぐ近くにいた少年を警察に対する威嚇目的で見せるために乱暴に立たせる。

「…あ」

乱暴に立たせたために少年は手に持っていたコーヒーをこぼしてしまい、それが自分の服を汚す。

「どつと立ちやがれ糞餓鬼」

強盗はそんなことには気にもとめずに少年に罵倒を浴びせる。

「なあ、お前のせいで服汚れたんだけど、どうしてくれんの？この服結構高かつたんだよ？ 今日初めて着たし……」

強盗は気づかなかつた。少年の座つている椅子の下に長細い鞄が隠すように置いてあることに。

「黙れ、知るかそんなこと。さつきとこつちに来い！ でないと脳天に風穴を空けるぞ!!」

強盗は知らなかつた。少年は怒らせてはいけない存在であるということを。そして――――

「てめえいい加減にしねえと……」

少年は既にキレているということを、強盗は気づかなかつた。

「しないと、何だつていうんだ？」

「え？」

強盗は何が起きたか分からなかつた。

自分が先ほどまで持つていた拳銃は宙に舞つていて、自分の首には“冷たい”何か”が当たっていた。そして、少年はどこから取り出しだか、いつ取り出したか分からぬが、”確実に自分は殺されそう”と思わせるような刀を持つていた。

そして強盗は理解した。自分が殺されそうになつていることに。

「ボス！」

そこへ、側にいた仲間が少年に向かつて発砲した。ボスと呼ばれた男は仲間の存在を思い出して冷静を取り戻した。

少年に向けての発砲は死角からで確実に殺つたと思つた強盗集団は、しかし少年が倒れていない、さらには”血すら流していない”という結果を目の当たりにした。

彼らは理解した。

「お前、星脈世代か!?」「だとしたら?」

「たとしたる？」

銀行に強盗の

銀行に強盗の

銀行に強盗の

— . — . — . — . — . — . — . — . — .

旧世紀、無数の隕石が降り注ぐ未曾有の大災害、落星雨によつて世界は一変した。既存の国家は衰退し、その代わりに企業が融合して形成された統合企業財体が台頭するようになつた。統合企業財体は、疲弊した国家を遙かに凌ぐ権力を有し、実質的に世界を裏から操つてい る。インペルティア

また、落星雨のもう一つの影響として、未知の元素である万応素^{マナ}が検出され、科学技術の発展を促すと共に星脈世代^{ジエネステラ}と呼ばれる特異な力を持った新人類を生み出した。星脈世代は今までの常識を覆す卓越

した身体能力と、星辰力^{ブランナ}と呼ばれるオーラを身に有している。故に星脈世代が常人を傷つけた場合、それが例え過失であつたとしても、ようほどの事情がない限りは厳罰に処されることが多いというのが現状となつてゐる。

しかし、そのような世の中の裏の世界において、統合企業財体から依頼を受けて、現代社会や統合企業財体に対して悪影響を及ぼすような集団、個人を排除するという活動を行つてゐた少年がいた。

簡単に言えば、統合企業財体にとつて危険であると判断した人間の集団を、”とある星脈世代の少年”が依頼を受けて活動不能にする。危険なテロ組織と言えど、星脈世代ではない人間を星脈世代の人間が傷つける、そして——

場合によつては殺すこともあつた。

その少年は、星脈世代であるので煌式武装^{ルーカス}を使つていた。だが、少年には1つ、大きな特徴があつた。少年は煌式武装を使つてゐる時も、常に鞘に納めた一振りの刀を身に付けていた。しかし、その刀を少年が使うところを実際に見たことがある人間は一人もいなかつた。だがある日、少年に襲撃された集団の中で運よく生き延びた男が、少年が鞘から刀を抜いたところを見たと言つた。その男は酷く怯え、詳細を聞き出すことはできなかつたが、その少年について、二つの言葉を残した。

——あれはただの刀じやない、妖刀だ
——あれは人間じやない、死神だ

その言葉から、裏社会では少年のことを死神騎士『ナイト・リー・パー』と呼ぶようになつた。

死神に鞘から妖刀を抜かせてはいけない。死神が呪われた刀を使つた瞬間、生き延びる可能性は無くなる。死にたくなければ、逃げるしかない。

こうして少年は、恐れられる存在となつた――

――――――――――――――

少年——かんざき 神崎 真鞘まさや は警察官が突入してくる前に銀行を後にし、人通りの少ない路地である男と連絡を取つていた。

「つていうことがあつたんだけど、上手いことやつといてくれるか?」
『久しぶりに連絡してきたかと思えば……。まあ他ならぬ君の頼みなら仕方がないが』

「悪いな」

『しかし珍しいな、君が不用意に星脈世代ではない人間を攻撃するなんて』

「いや、別に攻撃した訳ではないんだけどな。ちょっと睨んだら、泣きながら謝られたよ」

『……君に睨まれたその強盗達が少し可哀想に思つたよ。それで、どうしてそんなにイライラしていたんだい? 普段はそんなことで一般人を睨んだりきないだろ、君は』

「ちよつとな……アスターイスクの生徒会長共からの勧誘が鬱陶しくなつてたところだったんだよ」

『なるほどね。しかし君もそろそろどこかの学園に在籍したらどうだ

ね? 世間一般には君ももう高校生になる年代だよ』
「まあ確かに世界中をふらふら旅するのにもそろそろ飽きてきたところだしな……。だけど入るとしたらどこに入るかなあ」

『界龍ジエロンとかいいんじやないかと思うけどねえ』

「あそこは論外だ。あんなとこ入れば我が儘な餓鬼の相手をするはめになる」

『万有天羅か、確かに君にとつては苦手な相手なのかもしれないな』
実際に『儂の相手をしろ』という誘い？を何度も受けていた。

「まあ、あるとしたら星導館ぐらいしかないな」

『そういうえば君は星導館の生徒会長と仲が良いんだつたな』

「仲が良いと言えるのか分からぬがな。付き合いはそこそこ長い……と」

『?どうかしたかい?』

「俺に客みたいだ。また、連絡するよ御門さん」

そう言つて真鞘はある男—御門みかど 雅和まさかずとの通話を終了し、少し離れた位置に立つて少女に向かつて声をかけた。

「噂をすれば何とやらか……久しぶりだな、クローディア」

目の前にはつい先ほど話に出てきた星導館学園の生徒会長、クロード・ディア・エンフィールドが立つていた。

「お久びりです、真鞘。本当に、久しぶりですね……探すのに苦労しました」

「星導館の生徒会長殿がこんなところにいてもいいのか？他にもやることがあるだろ」

「ええ、もうそれは物凄い量の仕事が溜まっているでしょ。誰かさんがすんなりと私の誘いを受諾してくれれば、私はここにいなくてもよかつたんですけどね」

「それはまあご苦労なことだな。それで、俺をスカウトするために今日はどんな手段を持つてきたんだ？」

「……ぶっちゃけて言つてしまえば決定的と言えるほどのカードは持ち合わせていませんでしたので、星導館の現在の在名祭祀書ネームド・カルツの一覧と先日編入が決まった方の情報ぐらいしか持つてきてません。あとは、昔の好ということはどうでしようか？」

そういつてクローディアは情報を真鞘のもつ携帯端末に送信してきた。

真鞘はその情報をしぶしぶといった表情で目を通していく。

「まあ昔の好は別として、情報次第だな……あ、綾斗じやん」

真鞘はまず書いてあつた特待編入生の名前が自分の知り合いであることに気付いた。

「決定的じやないとかよく言うぜ。お前絶対俺と綾斗が知り合いだつて知つてただろう」

「あら、ばれましたか」

クローディアのその物言いに呆れながらも、真鞘は在名祭祀書にも一応目を通していく。その中で、真鞘はある一つの名前のところで目が止まつた。

「あら？ 刀藤さんともお知り合いだつたのですか？」

「……まあな

真鞘は昔出会つた少女のことを思い出し、またその少女が星導館に在籍していることに少々驚いた。

「それで、真鞘……。我が星導館学園に特待編入生として来ていただけないでしようか？」

クローディアは先ほどまでの笑顔を消し、生徒会長としての真剣な顔で真鞘に尋ねた。

「まあ仕方ないか。これも何かの縁かもしれないしな。他の生徒会長とも馬が合いそうにもないし……分かったよ」

「あら、よかつた。わざわざこんな所にまで出向いて断られでもしたらどうしようかと思つてました。その時は力ずくでも連れて帰るつもりでしたのに」

「……また物騒なこつた」

こうして真鞘の——死神騎士の星導館への編入が決定した。

「アスタリスクに来たのも久しぶりだな」

クローディアに会つた後、そのままクローディアとともに母国、日本に帰つてきた真鞘はそのままアスタリスクにまでやつてきていた。

水上学園都市”六花”——通称、アスタリスク。

北関東のクレーター湖に浮かぶ正六角形型のメガフロートに築かれた学園都市で、日本の領土に位置しているが治外法権領域になつてゐる。統合企業財体によつて六つの学園が設置されており、在籍する学生の大半を星脈世代が占める。アスタリスクでは年に一度、フェス^{星武祭}という力を持つ学生同士の大規模な武闘大会が開かれる。統合企業財体が主催している星武祭は注目度が非常に高く、世界中にライブ放送され、世界最大の興行規模を誇つている。

移動中にクローディアから聞かされた話によると、真鞘は綾斗と同じ特別特待生という形での編入となるようだ。手続きはほとんどをクローディアが済ませていたため、必要最低限の書類のサインだけを済ませれば真鞘は編入が完了されるという。なんとも手が早い話ではあるが、それに関して真鞘は何も言わなかつた。

「要望ねえ」

その後、クローディアは真鞘に学園に対する要望があるかどうかを聞いてきた。何でも、ほんと無理矢理に編入させるつもりであつたため、真鞘個人としての要望を少しは聞くつもりであつたとのことだつた。無理矢理編入させるという腹黒さは相変わらずであるが、要望を聞いてくれるということには、真鞘は少し驚いた。といつても、要望と言われてもすぐに思い付くこともなく、数分間考えていた真鞘だつた。

そうして思いついた唯一の要望が——

「自由に調理場と食材を使わせてくれ……つて、そんなことでいいん

ですか？」

「という何とも拍子抜けなものであつた。

「ああ、それで頼む。できれば学食とかにある本格的なところがいいな」

「え、ええ…それは構いませんけど……本当にそんなことで良いんですか？」

「ああ大丈夫だ」

真鞘は料理が趣味である。1人で世界各地を旅をしている頃には、野宿をすることもありその日の食事を自力で何とかすることも多かつた。イギリスといった国では料理が口に合わず、自分で作つたりもしたことがあつた。そういうしていいるうちに料理を作ること自体が、真鞘の趣味となり、さらにはその腕も上達してレパートリーも増えていった。

「まあ真鞘がそれでいいと仰るのならこちらとしては助かります」

「それ以外に思い付くことがないからなあ、武器は間に合つてるしな」
真鞘はそう言つて手に持つていてる鞘に収まつた一振りの刀を見た。
「最近のその子の様子はどうなんですか？」

「最近は大人しいな。たまに運動させてやつてるし、ずっと寝てるよ」「それはよかつた。しかし、刀をそのまま持ち運ぶのは少し問題がありますね」

「ああ、後で刀袋に入れておくさ」

「それなら大丈夫です。それと、申し訳ないのですが、私これから会議が数件入つてるのでそちらに行かなければいけないんです」

「生徒会長は大変だなあ」「自分で決めたことですから仕方ありません。それで、真鞘のこの後なんですが……」

「そう言つてクローディアは周りを見渡した。

「あ、來ました」

「ん？」

クローディアが見ている先から歩いてきた人は真鞘にとつて見覚えのある顔だつた。

「急に呼び出すよなあ……つて真鞘じやん」

「何やつてんだよ……アル」

アルフ・エンフィールド——

クローディアの実の双子の弟がそこに立つていた。

「何をやつているかつて聞かれたら生徒会長様に呼び出されただけで、これから何をさせられるかつていうのは知らされてないんだよね」

「そういう意味じやなくて、何でここにいるんだよ。いつアスタリスクに来たんだ？」

「あれ? 言つてなかつたつけ? 僕4月にここに入学したんだよ」

「初耳だぞ、俺は」

半目で睨む真鞘にアルフは苦笑いで誤魔化した。クローディアは2人のそんなやり取りを微笑みながら見ていた。

「そ、それで……なんで僕は呼び出されたの?」

「それはですね……真鞘は今着いたばかりなんですが、私がこの後予定が入つてしまつていて……。真鞘1人を待たせるのも気が引けましたので呼び出しました。夕方には戻つて来れると思ひますので、それまでにアルに学園内を案内でもしてもらおうかと思ひまして」「なるほどね……まあ了解しましたよ。どうせ拒否権はないんだろうし」

アルフの返答を聞いた真鞘はそれだけで理解した。

——ああ、扱き使われるんだな……

「ではよろしくお願ひしますね。終わつたらこちらから連絡させてもらいますので編入の最終手続きはその後にお願いします」

そう言つてクローディアは歩いて行つた。

「アル……お前も大変だな」

「もう慣れたよ。わざわざ僕を生徒会の副会長にまでして、堂々と雑

用を押し付けるようにしたからね」「何というか…ドンマイ」

「それはこつちの台詞だよ。今ここにいるつてことは無理矢理、ディア姉に連れてこられたんだろう?」

「まあ俺が頷いてなかつたら実力行使だつたろうな……」

「お互い苦労してるな(ね)……」

2人揃つて溜息を吐いた。

クローディアと別れた後、アルフは姉に言われた通りに真鞘に学園内を案内した。真鞘も特にやることもないでの、アルフについて周り時間を潰すことにした。学園内の案内と言つても、各施設を詳しく説明しながら回っていたらそれなりの時間が過ぎていた。全て案内し終わつた頃には、時間はすでに夕方になつており、クローディアからの連絡がくるのもすぐだろうということで中庭のベンチで待つことにした。

「にしても、久びりだなあアル」

「ほんとだよね、去年ヨーロッパで別れて以来かな」

真鞘とアルフは共に行動している時期があつた。エンフィールド一家とはその頃からの付き合いとなつてゐる。真鞘が死神騎士であると知る学生は、各学園の生徒会長を除くとアスタリスクにはほとんどない。アルは希少な存在の1人である。

「アルはなんでアスタリスクに来たんだ?」

「まあ特に理由はないんだけどね。強いて言えば、この世界で僕が楽しめそうのがあとはここぐらいだつたつてことかな」

「俺も同じような感じなんだよな。でも何でわざわざ星導館に来たんだ?ここに来れば嫌でも姉に面倒事押し付けられるつて分かつてただろ?」

「僕だつてはじめは他のところに行こうとしたよ……、ディア姉に捕ま

らなかつたら」

「……」

そこまでして弟に面倒事押し付けたかつたのか、あの腹黒女は：「まあ僕は満足に戯戯べたらそれでいいんだけどね」

「お前つて昔から見かけによらず戦闘狂だよな」

「ははは、よく言われるよ。でもそれだけじゃないんだよね。こいつの面倒も見ないといけないし」

アルフはそう言つて煌式武装ル'クスを取り出した。

「これ使つた感想を定期的にあの人に報告しないとまた怒られるからね」

「それに関しては俺も同じだな。ほんと、あの狂つた兎は何とかなんねえかな」

自分たちの煌式武装を作つたうき耳を付けた頭があれな天才発明家を思い出し、2人はため息を吐いた。

「あ、デイア姉から連絡だ。こつちに来てくれるつてさ」

「了解、まあ行き違いになつても面倒だし素直に待つことにしておこう」

「そうだね」

数分後にクローデイアが合流し、移動することになつた。

「このまま生徒会室に行つて、手続きを完了させてしまつてもいいのですけども、時間も時間ですので先に食事にしますか？」

「確かに腹は減つてきたな、そうするか」

「異議なし」

「では学食に向かいましょうか。ついでに真鞘は調理場も見ておきますか？」

「ああそうだな、ちょっと覗いておくかな」

「何なら実際に作つてもらつてもいいですよ?」

クローデイアの言葉に最も反応したのはアルフだった。

「真鞘の料理が食べられるの!?」

「お前……そんな反応されたら作るしかなくなるじゃねえか」

「いや、だつて真鞘の料理なんか久しぶりだし、真鞘と別行動しだした最初の頃は何食べても不味かつたし」

「はあ分かつた、作るよ。その変わり材料何あるか知らないから、メニューはテキトーだぞ」

「真鞘の料理なら、テキトーでも何でも全部三ツ星だよ!!」

「アルがそこまで言うのでしたら私も食べてみたくなつてきましたね」

「別にいいよ。2人分が3人分になつたところできほど変わらないし。ていうかお前、それ見越して調理場の話しだしただろ」

「それは考え過ぎです」

「どうだかな」

こうして3人は星導館学園の学食へと向かった。

移動中アルフは異様にテンションが高く、他の2人は軽く引いていたが。

「旨かつたあ!! やつぱ真鞘の料理は最高だね!!」

「真鞘の料理がまさかあそこまで美味しいとは……女として負けた気分です」

「大げさだ」

真鞘、クロードイア、アルフの3人は、星導館学園内において最高級店と言われる学食の『ル・モーリス』に来ていた。そのル・モーリスの厨房を特別に使用させてもらつた真鞘だったが、初めは料理長をはじめとしたル・モーリスのスタッフも学生が自分たちの厨房を使うことにあまりいい顔をしなかつたが、生徒会長であるクロードイアからの頼みということもあり、渋々といった感じで真鞘に使用を許した。

しかし、真鞘が調理を開始するとスタッフたちの様子はみるみるうちに変化していき、真鞘のプロ顔負けの技術に畠然としていた。出来上がった真鞘の料理を食べたシェフたちは涙を浮かべて負けを認め、料理長は感動しながら真鞘に握手を求めた。

「料理1つでプロの料理人に負けを認めさせた真鞘は凄いですね」

「これからも使っていいから自分達にも食べさせてくれって言われたよ」

「プライドはずたずたですね」

「この料理食べられるならプライドなんか捨ててやる……だつてさ。どいつもこいつも大げさなんだよ」

「真鞘の料理はそのレベルなんだよ。試しに商売してみたら?」「面倒くせえよ。それで、この後どうするんだ? クロードイア」

真鞘は店を出る準備をしながらクロードイアに聞いた。すでに食事は終え、ついでに食後のコーヒーも飲んでこれ以上学食にとどまる理由はなかつた。

「(一)のまま生徒会室までお越しいただいて書類にサインをしていただこうと思いましたが、少し量が多いですし時間も遅いので、今ここで渡しておきます。部屋で書いて、明日の朝に持つてきてくださいされば大

丈夫ですのです

クローディアはそういうつて、書類の入った封筒を真鞘に渡した。

「了解、どこに持つていけばいいんだ？」

「生徒会室でお願いします。アルフに案内してもらつてください」

「分かつたよ。てか俺の部屋つてどこだ？ 学園の寮だつたら誰かと相部屋とかになるのか？」

「あ、それでしたらアルフと同室ということになつています」

「よろしくね」

「ああ、それなら俺も楽でいいや。こつちこそよろしく頼む」

「分からぬことがあれば、アルフに聞いてください。あ、封筒の中の書類は一応全て目を通しておいてください。それではお休みなさい、真鞘」

「おお、お休み。また明日な」

真鞘とアルフはクローディアと別れて、自分たちの部屋へと移動した。

「おお、意外と広いんだな」

「そう？冒頭の十二人の部屋になつたらもつと豪華だと思うよ。あ、コーヒーいる？」

「頼むわ」

部屋には簡易的なキッチンもあり、簡単な料理なら作れるようになつていた。

アルフにコーヒーを用意してもらつている間に、真鞘は届けられたいた荷物の整理に取り掛かつた。

「とりあえず、渡された書類のサインやつちやつたほうがいいと思うよ。結構あると思うから」

「そもそもそうか」

アルフに言われて真鞘はクローディアから受け取つた封筒を開けて、中に入つていた書類を取り出した。

「……」

「うわあ、これは酷いね」

取り出した書類はかなりの量があつた。

「おい、これを明日までつていうのはどうなんだ？」

「大丈夫、サインがいるのははじめの10枚ぐらいだと思うから」

「でもこれ全部一応は目を通しておいたほうがいいんだろ？」

「それは、まあそうだね」

「…………」

「まあそればつかりは僕も助けてあげられないからね、頑張つて」

「…………とつと読んで寝るかな」

結局真鞘が寝ることができたのは夜中になつてからだつた。

ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー

次の日の朝、真鞘とアルフは生徒会室で待つクローディアに書類を渡すために校舎内の廊下を歩いていた。

「そういうや綾斗はいつ学園に来るんだ？」

「もう1人の編入生か。彼なら予定通りいけば今日の朝に到着するはずだよ」

「ならそろそろか、授業とかはいつから出るんだ？」

「今日から出るみたいだよ」

「え、!? 手続きとかは？」

「天霧君に関してはディア姉が全部終わらせてるからね」

「俺とは扱いが段違いだな」

「それは仕方ないよ、”死神騎士”っていう名前は有名なんだからね。アスター^{アスター}スクには真鞘のことを知つてる人もいるつてことは覚えておいたほうがいいよ」

「そんな奴にはあんまり出会いたくはないけどな」

真鞘の裏社会での活躍を知つてている人物ということは、少なからず社会のそいつた面に関わつていてるということになる。

「まあ各学園の生徒会長とその側近ぐらいだと思うよ。さて、到着つと」

アルフにつられて真鞠が止まる、目の前には『生徒会室』と書かれた部屋があつた。アルフがドアをノックして、返答を待たずに入つて行つた後を追つて真鞠も部屋の中に入つた。

「おはようございます、真鞠、アルフ」

「ああ、おはよう」

「おはよう、ディア姉」

部屋の中ではすでに到着していたクローディアが2人を出迎えた。

「よく寝られましたか、真鞠？」

「お前それ本気で言つてるのか？書類読んでたら夜中だつたよ、お蔭で寝不足」

「あら、全部読んでくれたんですね。サインの必要な書類以外は今日じゃなくてもよかつたんですけど」

「……」

クローディアのあんまりな言葉に真鞠は畳然とするしかなく、アルフのほうを見ると目だけで「ドンマイ」と言つてきた。まあアルフに怒りをぶつけるのも間違つているので真鞠は仕方なく行き場のない怒りを収めた。

「そういうや、綾斗はまだ来てないのか？」

「そうなんですよ、約束していた時間に正門に向かつたのですが姿が見えなくて。もしかしたら早く到着して学園内を見て周つてるのかかもしれません。一応探してもらつてるので真鞠は仕方なく行き場のない

その時、アルフの携帯端末に着信が入つた。

「どうしたの？……はあ！……えつと、場所は？……了解、会長とそつち向かうよ」

通話を終了したアルフは2人に向けて言つた。

「天霧君が見つかつたよ」

「それは良かつたです」

「いや、良くないよ……」

アルフの物言いに、あまり良い状況ではないことは分かつた。

「なんかあつたのか？」

「原因が全く意味不明だけど……今決闘してるらしい、天霧君」
「…………え？」

アルフに連絡が入った後、すぐさま3人は生徒会室を出て、綾斗が決闘をしているという場所へと向かつた。

「んでも、何であいつはいきなり決闘なんかしてるんだ……しかも冒頭の十一人と」

綾斗と決闘をしているのは、星導館学園の序列5位であるユリス^{アレクシア・フォン・リースフェルト}であるということらしい。在名祭^{ネームド・カルツ}祀書^書にも一通り目を通していた真鞘^{マサヒサ}もユリスの名前は見ていた。華焰^{グリューエンローゼ}の魔女^{ストレガ}といふ2つ名で恐れられる魔女^{魔女}であるらしい。「原因となる場面を見ていた人はいないみたいだけど、どうやら天霧君が何かやつて華焰の魔女を怒らしてしまつたみたいだね」

「何やつたんだよ」

「今決闘を見ている人によると、華焰の魔女は天霧君のことを『変質者』って言つてるみたいだよ」

「……本当に何やつたんだ、あいつ」

女子から変質者と言われるのだからよほどのことをやらかしたのだろう。

「とりあえず早く向かいましょう。ユリスは一度言つたことは曲げませんから、面倒なことになる前に止めましょう」「どうやつて止めるの?」

「生徒会長の名前を使えばどうとでもできます」

「うわあ、職権乱用だ」

「使えるものは使いませんと」

それはもつともではあるが、それをクローデイア^{腹黒女}が言つてしまふの

はどうかと思う。しかし、真鞘もアルフもそれついては何も言わない。誰も余計なことを言つて飛び火を受けたくない。

喋りながらも急いで移動していると、外に人だかりができているのが見えてきた。しかし、その人たちは慌てて退避しているように見えた。

「どうやら大技使うみたいだね」

「さすがにそれは周りの被害が出る可能性があるので止めないとけないですね」

「いや、綾斗なら大丈夫だろう」

真鞘の言う通り、綾斗はユリスの放つた大技の炎を自身の持つ煌式武装^{ルーグス}で打ち消した。しかし、問題はそこではなかつた。

「今、明らかに外部からの攻撃があつたよな」

「はい、私もユリスを狙つた攻撃が見えました」

「また、せこいことをする奴がいるねえ、……とかあれちょっとやばくない？」

ユリスに向けて矢を放つた相手を探していた真鞘だが、アルフに言われて綾斗とユリスのほうに目をやつた。そこでは、綾斗がユリスを押し倒していた。さらには2人の反応からするに綾斗の手はユリスの胸に当たつてたのだろう。いわゆるラッキースケベである。

「僕ラッキースケベを生で見たのは生まれて初めてだよ」

「あいつ意外とああいうところがあるんだよな」

真鞘とアルフは呑気に会話をしているが、周りのギャラリーの言葉もユリスの怒りに油を注いで爆発寸前であつた。どうやら怒りすぎて星辰力^{ブランナ}を制御できなくなつているらしい。

「クローディア、そろそろ止めないとまずい」

「そうですね」

真鞘に言われてクローディアは、手をパンパンと叩きながら2人の仲裁に入った。

「はいはい、そこまでにしてくださいね」

「確かに我が星導館学園は、その学生に自由な決闘の権利を認めてい
ますが……残念ながらこの度の決闘は無効とさせていただきます」
群がるのギヤラリー、というよりも野次馬連中を押しのけながらクローディアは綾斗とユリスの前へと近づいた。真鞘とアルフの2人も少し距離を置いて、その後を追いかけた。

すると、予想通りユリスの方がクローディアに突つかかかった。

「……クローディア、一体なんの権利があつて邪魔をする？」

「それはもちろん星導館学園生徒会長としての権利ですよ、ユリス」

——うわあ、こいつ本当に生徒会長の権利使いやがった。

真鞘とアルフは同じことを考えるも、二人とも顔には出さなかつた。当のクローディア本人はそんなことを気にもせず、笑顔で言葉をつづけた。

「赤蓮の総代たる権限をもつて、ユリス＝アレクシア・フォン・リースフェルトと天霧綾斗の決闘を破棄します」

クローディアの言葉によつて、赤く発行していた2人の校章がその輝きを失つた。

ちなみに真鞘は先ほど、生徒会室を出る直前にクローディアから校章を受け取つてゐる。

いまだ不満を口にするユリスの相手はクローディアに任せ、真鞘は呆けている綾斗に声をかけた。

「久しぶりだな、綾斗」

「え!? もしかして、真鞘!? うわあ、久しぶりー!! 何年ぶりだろう」

「お前の家に居候してた頃以来だから、6年ぶりってところかな?」

真鞘は嘗て綾斗の家、天霧家に居候の身として住んでいた時期があつた。

しばらく真鞘と綾斗が話していると、クローディアに突つかかつて

いたユリスが真鞘に気付いた。

「そういえば、見ない顔だな。そこの変質者の仲間か？」

「……綾斗、お前マジで何やつたんだ？」

「いや、事故だつたんだって」

綾斗は両手を振つて否定するが、本当に何をしでかしたのだろうか。

「まあそれはいいか。俺は綾斗と同じでここに編入してきた神崎真鞘だ。よろしく、ユリス」

「ほお、私の名前を知つているのか」

「そりやあ冒頭の十二人の1人だからな。予習ぐらいはしてるさ」

「もう一人の編入生とは大きな違いだな」

「うつ……、て言うか、真鞘も編入してきたんだ」

「まあな。ところでクローディア、時間は大丈夫なのか？」

真鞘は腕時計で時間を確認しながらクローディアに問いかけた。

この後、説明やら手続きやらがあるのなら、そろそろ移動しなければホームルームに遅れてしまう。さつき聞いていた限りでは綾斗は最終手続きが残っているということでユリスには納得してもらつたらしい。ちなみにそのようなものは存在せず、綾斗はすでに学園の生徒であることを知っている真鞘とアルフは、2人に見えないよう苦笑いをしていた。

「ユリス、先ほども言いましたが彼にはまだ最終手続きが残つていますので、この決闘は成立しないことになります。よろしいですね？」

「……ああ、分かつた」

「それでは移動しましようか」

「……あつ!!」

クローディアの言葉で移動を始めようとしたが、綾斗が何かを思い出したかのように立ち止まつた。初めは何のことかと他の人たちを考えたが、辺りを見渡していることから、何を探しているのかすぐに分かつた。

「あの、ちょっと待つて……」

「捨て置け。どうせとつぐに逃げている」

ユリスを狙つた犯人を捜そうとした綾斗の肩を、ユリスがつかんだ。

「まあ今からじやあもう無理だな、諦めろ綾斗」

「残念だけど冒頭の十二人が狙われるケースは少ないからねえ。でも今回のはちょっとやりすぎかな」

「そうですね、風紀委員に調査を命じておきましょう」

「ありがとう、えつと……」

「はい、星導館学園生徒会長、クローディア・エンフィールドと申します。よろしくお願ひします」

「生徒会副会長のアルフ・エンフィールド、クローディアの双子の弟でもあるね。よろしく、天霧君」

「お前らあいさつはいいけど、本当に時間無くなるぞ」

ホームルームに遅れたぐらいなら生徒会長が何とかしてくれるのだろうが、初日から遅刻はしたくない。

「それでは行きましょうか。天霧君は生徒会室に行きましょう、真鞘はアルフとユリスと教室に向かってください」

「ああ分かつたよ。あ、綾斗、クローディアには気を付けろよ」「え？ なんで？」

「……まあすぐに分かる」

「？まあ分かつたよ」

真鞘はクローディアにばれないように小声で綾斗に注意を促したが、無意味だろうと思ひながらアルフを見た。
(綾斗とアルは似てるからな。腹黒女の餌食だろう……)

クローディアが別れる前に見せたまるで悪戯を企てるような顔を思い出して、この後綾斗に訪れるであろう展開に同情しつつ、真鞘はアルフとユリスとともに教室に向かつた。

「あー、とゆうわけで、こいつらが特待編入生の神崎と天霧だ。テキトーに仲良くしろよ」

「やつさん、紹介適当すぎだろ」

「前言撤回だ、神崎とは仲良くしなくていい。全員無視だ」

「酷えなおい!!」

「ここでその呼び方をするな神崎、次はないぞ」

「……了解、谷津崎^{やつざき}センセー」

言いながら釘バットを振りかぶつてくる教師？を目の前に、殴られたくない真鞘は素直に従う。

クローディアと綾斗と別れた真鞘とアルフは授業を受ける用意を取りに、ユリスとも別れて一度部屋に戻った。その後、編入生ということもあって、真鞘は教室ではなく職員室に案内された。そこまでは何も問題はなかつた。真鞘にとつて問題だつたのは担任と言わわれて紹介された、ひょんなことから昔知り合つた、というよりも絡まれた八津崎^{やつざき}匡子^{きょうこ}という名の元ヤンの暴力女だつた。知り合いが担任だと楽なのではと思うが、相手が相手だとその真逆にもなる。

(腹黒女^{ハラモロコノ}が生徒会長で、暴力女^{バイヨウメイ}が教師つて……大丈夫なのか？この学園)

「おい、お前今何か失礼なこと考えてないか？」

「そんなことないですよ、谷津崎センセー」

「本当か？」

「本当ですよ、八裂きセンセー」

「お前、後で殺す」

この教師、教師が生徒に対して絶対に言わないであろう言葉を平然と言つた。

「ああもう話が進まん、てめえらとつと挨拶しろ。あと神崎は死ね」

「いや、すいませんって……ああ、編入してきた神崎真鞘だ、よろしく」

「えつと、同じく編入してきた天霧綾斗です、よろしく」

無難に挨拶を行つた2人だが、そんな彼らを見るクラスメート達の

視線は様々であった。編入してきて早々に冒頭の十二人と決闘をした綾斗に対する興味津々なものや、探るようなもの。そして自分達にとつて恐怖の対象でしかない担任に対し、ふざけた態度をとつた真鞘に対するある種尊敬のようなものまで。そんな中である少女は複雑な表情を浮かべ、ある少年は苦笑いを浮かべていた。

「お前らの席だが……ああ火遊び相手の隣と、生徒会の奴隸の隣が空いてるな、そこにしろ」

「だ、誰が火遊び相手ですか!?」

「だ、誰が生徒会の奴隸ですか!?」

少女と少年、ユリスとアルフは同時に立ち上がり同時に叫んでいた。

「お前ら以外に誰がいるか。リースフェルト、朝っぱらから派手にやりやがって。レヴォルフじやねーんだぞ、うちは」

「ぐつ……」

言い返せずにいるユリスを置いといて、真鞘と綾斗は自分の席に移動する。真鞘の席はアルフの隣で、その前でユリスの隣の席に綾斗となつた。

「まさか全員揃つているとはな」

「……笑えない冗談だ」

真鞘の言葉にユリスはため息をつく。

「今朝はいろいろとあつたけど、これからよろしくね」

ユリスの言葉にもめげずに綾斗は話しかけた。

「お前には借りができた。要請があれば一度だけ力を貸そう。だが、それ以外では馴れ合うつもりはない」

ユリスの返す言葉は相変わらずのものだつた。もしも真鞘が綾斗の立場だつたら、キレていただろう。

「はは、振られたな。まあ相手があのお姫様じゃあ仕方ないか」
綾斗の1つ前の席から、綾斗にそう声をかけてくる人懐こい笑顔を浮かべた男子がいた。

「俺は夜吹英士郎、一応お前さんのルームメイトつてことになつてる」「ルームメイトつて……寮の？」

「そういうこと、一応うちの寮は基本2人部屋だからな」「じゃあ今までそこを1人で使っていたのか、悪い、狭くなっちゃうな」

「いってことよ、俺は賑やかな方が好きなんですね。それと……」

夜吹は綾斗の後ろに座る真鞘に目を向けた。

「そつちは久しぶりだな、神崎」

「ああそうだな、夜吹」

「あれ? 2人知り合いだつたの?」

顔見知りで会つた2人に綾斗は疑問を持つ。

「まあな」

そんな綾斗に対する返答は2人とも同じであつた。

「そんでもつて、さつき自己紹介したけど改めて。僕は生徒会の副会長やつてるアルフ・エンフィールドだよ。生徒会長のクロード・ディアは僕の双子の姉になるね。あ、生徒会の奴隸なんかじやないからね」

「え? 違うのか?」

「ほんと、やめてよ!」

アルフに対しても真鞘と夜吹の2人は同じ返答をした。

「はは、まあアルフもこれからよろしくね」

「うん」

結局、ユリスがこの会話に入つてくることはなかつた。

授業が終わつた放課後、真鞘と綾斗は疲れ果てていた。

「お疲れだね、2人とも」

「俺もう明日から不登校になろうかな」

「さすがに、それは……ありかな？」

労いの言葉を言いながら、苦笑いを浮かべるアルフ。

2人がここまで疲れている理由は授業と授業の間の休憩時間にクラスメートから受けた質問攻めが原因であった。綾斗は編入早々に冒頭の十二人であるユリスと決闘したことに対する質問、真鞘には自分たちの鬼軍曹とどういう関係なのかを根掘り葉掘り聞かれることとなつた。

「人気者は大変だな」

夜吹も会話に参加していく。今現在は真鞘、綾斗、アルフ、夜吹の四人で教室から出て廊下を移動している。

「まあおかげさまでいろいろと分かつたよ」

「ほお、例えば？」

綾斗の言葉に一同は疑問を覚え、夜吹は聞き返した。

「まず、人気者は俺じやなくてユリスのほうだ。みんな俺に興味があるんじやなくて、『ユリスと決闘した誰か』に興味があるんだと思う」「おや、ご明察」

夜吹はよくできましたと言いたげな顔で答えた。

「でもそれなら本人に聞けばいいと思うんだけど」

「馬鹿か綾斗、あんな雰囲気のユリスが答えてくれると思うか？」

「……確かに多少とつつきにくい感じはあるかな」

「まああのお姫様は他人と距離を取つてるのは間違いないからな。そもそも……」

「あのちょっと待つて、そのお姫様つているのはあだ名か何か？」

綾斗が言つたことには、真鞘も確かに疑問を持つていた。

言われてみると、お姫様という言葉はユリスにはぴつたりな気もするが、誰がそんなあだ名を考えたのだろうか？

「んー、あだ名つづーかなんつーか、正真正銘のお姫様なんだよ、ユリスは」

「……は？」

「ああなるほどな」

綾斗は自分の耳を疑い聞き返すが、真鞘は納得した。

夜吹の言葉をアルフが説明する。

「インベステイア洛星雨以降、歐州のあちこちで王制が復活したでしょ？その中の1つでリーゼルタニアアって国があつて、そこの第一王女がユリスなんだ。真鞘は知つてるでしょ？」

「ああどつかで聞いたことがあると思つたけど、そんな国あつたな」世界各地を渡つた経験を持つ真鞘はリーゼルタニアにも少し訪れたことがあつた。

「ちなみにフルネームはユリス＝アレクシア・マリー・フロレンティア・レナーテ・フォン・リースフェルト。ヨーロッパの王室名鑑にも載つてるぜ」

「へえ……やけに詳しいね？」

「そいつが商売なもんでね、これでも一応新聞部なのさ」

夜吹は不敵に笑つて見せた。

「あれだけ可愛いくて、強くて、しかもお姫様ときたら誰だつてほつときやしない。彼女がうちに来たのは去年なんだが、それこそ今日のお前らなんて目じやないくらいのファーバーつぶりだつたんだぜ？」

「目に浮かぶな」

「目に浮かぶようだよ」

「ところがだ。あのお姫様はそんな連中に向かつて何て言つたと思う？『うるさい、黙れ。私は見世物ではない』だ」

「……目に浮かぶな」

「……目に浮かぶようだよ」

夜吹の言つたことに、2人は苦笑する。ちなみにアルフもこの話を聞いたときは同じように苦笑した。

「実力はあるから、面白く思わない連中が決闘を申し込んできても見事に返り討ち。あつという間に冒頭の十二人入りだ。その結果、誰も

が一歩引いてしまう孤高のお姫様の出来上がりってわけだ

「ふうん、つてことは友達とかは……」

「いないんだろうな」

「まあな……つて悪い、ちょっと待った」

夜吹の携帯端末に着信が入つたらしく会話を止めて通話を始めた。アルフはそれを見計らつて、真鞘に話しかける。

「そういうえば真鞘、今日はル・モーリスに行くの？」

「一応そのつもりだぜ、今日の夕方に俺の希望してた食材が届くつて料理長から連絡があつたからな」

「もうすっかり料理長と顔なじみだね」

「ほんとだよ」

料理は心をも繋ぐ、とはよく言つたものである。

会つて一日しか経つていないにもかかわらず、すでに真鞘と料理長はかなり仲良くなつていた。

「他のスタッフが同情しそうだよ。ところで時間は大丈夫なの？」

「ああそろそろ……」

そう言いながら、腕時計で現在の時刻を確認した真鞘の顔は真っ青になつた。

「もうこんな時間かよ！やべえ約束の時間まであと少しかよ。悪いアルフ、綾斗、俺さき行くわ。夜吹にも伝えといってくれ」

「はいはーい。今日もご馳走になつていいの？」

「金取るぞ」

「うーん、まあ仕方ないか。それでもいいよ」

「……お前まじかよ、まあ了解」

真鞘としては有料と言えば引くと思つたが、アルフは料金を支払つてでも食べたいらしい。

「じゃあほんとやばいから、行くわ」

「はーい、また後でね」

「おお」

「また明日、真鞘」

――――――――――――――

真鞘は校舎内を走つて移動していた。アルフに案内してもらつたおかげで学園内の地理はすでに頭に入つていて、その中で今いる場所から最短でル・モーリスに行くルートを考え、到着時間を予測する。（このままいけば、ギリギリ間に合うかな、こつちから頼んでおいて遅刻は申し訳ないからなあ……!?）

真鞘が校舎を飛び出して外の通路を横切ろうとしたとき、ちょうど死角になっていた柱の陰から、1人の少女が飛び出してきた。慌てて減速するも間に合いそうになく、このままいけば正面衝突は免れない。

（クソツッ!!）

一瞬遅れて相手の女の子も気づき、驚いた表情をこちらに向けてい る。

切羽詰まつた真鞘は無理矢理に方向転換を試みた。電撃に似た痛みが身体中を走つたが、これで回避ができるだろうと真鞘は思った、が。

身をかわしたその先に、かわしたはずの少女の顔があつた。

「きやつ!!」

「……え？」

今度こそかわしきれずに2人は激突した。

幸いにもある程度減速していたためにそれほど衝撃があつたわけではないが、相手は女の子である。そして、真鞘が一番に驚いたのは、その女の子が自分の顔見知りであつたということである。

真鞘はとっさに受け身を取るとすぐさま起き上がり、地面に座り込んでいるその少女に声をかけた。

「大丈夫か？……綺凜」

「え……真鞘さん！」

目の前の銀髪の少女——刀藤綺凜とうどうきりんは真鞘の顔を見て驚きの表情を浮かべた。

真鞠は久しぶりに再会した綺凛を見ていたが、そこで一つ、重大なことに気が付いた。

「綺凛、とりあえずスカート直せ」

膝を立てるのもあつて、思い切りスカートがめくれてしまい、下着が見えてしまっていた。真鞠は顔を赤らめながら、目をそらした。

「はう……っ！」

綺凛はわたわたと焦った様子でスカートを直し、縮こまるように両手でぎゅっと自分の体を抱きしめた。そんな小動物を思わせる様子は、昔と変わらないなと真鞠は感じた。しかしその行動は、昔の綺凛には無かつたはずの豊満な胸を強調させてしまい、真鞠は目のやり場に困った。

「と、とにかく、悪かつたな綺凛、不注意だつた」

真鞠が手を差し出すと、綺凛はしばらく戸惑つたがしばらくたつておずおずとその手を取つた。

「い、いえ、私のほうこそごめんなさいです。音を立てずに歩く癖が抜けなくて。いつも伯父様に注意されてるんですけど……」

「相変わらずだな、お前は。あ、そこ何かついてる」

よく見ると、綺凛の綺麗な銀髪に、小指ほどの枯れ枝が一本絡まつていた。

「ふえ……っ？ ど、どこですか？」

真鞠が指摘すると綺凛は慌てた様子で髪に手をやつたが、自分からは見えないらしく、見当違いのところばかりを探してしまつている。おろおろしながら探す綺凛の様子が妙に可愛いくて、しばらく眺めていたいと思つた真鞠だが、同時に可哀想にもなつた。

「ほら、取つてやるからじつとしてろ」

「は、はい」

真鞠は苦笑しながら手を伸ばして、髪を傷めないように小枝を取り除いた。

「あ……ありがとうございます」

綺凛は顔を真っ赤にしながら真鞠にお礼を言つた。そしてじも

じと俯き、それつきり黙ってしまった。時折チラツと視線を上げて何かを言おうとするが、真鞘と目が合うと、すぐにまた下を向いてしまう。そんな綺凜の様子を見かねた真鞘から綺凜に声をかけた。

「久しぶりだな、綺凜」

「は、はい!!お久しぶりです、真鞘さん」

真鞘に声をかけられて驚くも、言葉を返す綺凜だったが、すぐまた黙り込んでしまう。しかし、数秒俯いた後に意を決したように顔を上げて、真鞘に話しかけた。

「あ、あの、真鞘さんはどうしてここに?」

当然の疑問を持つた綺凜は、そのことを真鞘に質問し、真鞘はそれに答えようとした時だつた。

「綺凜! そんなんところで何をやつている!!」

「は、はい!!ごめんなさいです、伯父様!! すぐに参ります」

中等部校舎の入り口に立つ壮年の男性が、綺凜に向けて大きな声を響かせる。綺凜はビクリと身をすくませ、焦った様子でおどおどし始めた。

「え、えっと、その……」

「いいよ、俺も今ちよつと急いでいるから。そうだな……」

久びりに再開した綺凜ともう少し話がしたいが、今はお互い時間が無いようだつた。

「今日はこの後、時間は空いてる?」

「え、今日ですか? そうですね……今から少し用事があるので、それが終われば特に予定はありません」

「分かった。じゃあ時間が空いたら、ル・モーリスに来てくれ。多分俺はそこにいると思うから」

「は、はい!!分かりました。そ、それじゃあ……」

「ああ、また後で」

綺凜はもう一度真鞘にお辞儀をして、小走りで去つて行つた。

真鞘はその姿を呆然と眺めていたが、ふと我に返つて現在の時刻を確認した。

「遅刻は確定だな……」

真鞘も小走りで移動をはじめ、ル・モーリスに着くまでに遅刻の理由を考えることにした。

「道に迷つてたとかでいいかな。ここ、広いし」

真鞘の考えたそのテキトーな言い訳は、意外にも料理長にあつさりと認められた。曰く、『この学園は迷路みたいだから編入してきて間もないお前は仕方がない。でも次はないぞ』とのことだつた。

料理長の優しさに感謝しながら、真鞘は自分とアルフ、そして綺凜の分の夕食を作り始めた。

「へえ、真鞘があの疾風迅雷と知り合いだつたなんてね」

真鞘とアルフは、ル・モーリスで真鞘の夕食を食べながら先ほどそれぞれに起きたことを話していた。アルフの方では、どうもユリスに序列九位のレスター・マクフェイルとその取り巻きが絡んでいるところに出くわしたらしい。何でも、レスターはユリスに一度決闘で負けからライバル意識を持つていて、再戦の要求を何度もユリスにしているらしい。当のユリスはその要求を拒否しているらしいが、レスターは根気強く要求を続けているらしいが、アルフから見ても、それは鬱陶しいものとなつていて。

そして今日レスターが、ユリスが決闘をしたということを聞いて、ユリスに詰め寄つたことであるが、問題なのはその場に綾斗本人が出て行つてしまつたということだ。

「大人しく見ていいればいいものを……、あいつは相変わらずだな。面倒事に自分から首を突っ込んでいく」「止める暇もなかつたよ……」

状況が状況なだけに、綾斗が出ていつたことは状況を悪化させたらしいが、さすがにその場でレスターが暴れるということはなかつたらしい。

「でも彼は何者なんだい？ レスターに詰め寄られても飄々としていたよ」

「あいつは肝は据わつているさ。実力もそこそこある」

「へえ、ル・真鞘と比べたら？」

「まあ『煌式武装

ル・クス

のほうを使うのなら』いい勝負か、ギリギリこつちの負けかな」

「ほえー、真鞘にそんな評価されるなんて……ちよつと戦つてみたいかも」

「……お前つて言葉遣いとか雰囲気のわりに、戦闘狂だよな」「まあね」

姉であるクローディアが腹黒いのと同じように、弟であるアルフも

戦闘狂という一面を持つている。そして、姉と同じ理由で自分の口調を丁寧にしている。一度、真鞘とアルフが本気で喧嘩をしたことがあるが、気づいたときには辺り一面が焼野原となっていた。

真鞘とアルフが話しながら食事を続けていると、ル・モーリス内に綺凜が入ってきた。

「ごめんなさいです。遅くなりました」

「いや、いいさ。別に詳しく時間を決めていたわけじゃないからな。そういうや綺凜、晩飯食べた?」

「いえ、まだです。これから何か食べようと思つていたんですけど……」「なら、俺が作つたの食べるか?まだ1人分残つてるんだけど」「え!?それ真鞘さんが作つたんですか!?

真鞘の提案に、綺凜が驚く。確かに、一学生が学食で自分の夕食を作ることとは普通ではありえないことなので驚くのも当然なのかもしけれない。

「ああ、こここの料理長に頼んで、厨房の一部を貸してもらつてるんだ」「真鞘さんはお料理が出来るんですね、羨ましいです……」

「まあ料理が趣味みたいなものだからな。それでどうする?」「え、でも……」

もじもじしながら返答に困る綺凜。食べたいのだろうが、年上2人の前で遠慮してしまつていた。

「別に遠慮しなくても、趣味の範疇でしかないんだから金も取らないし」

「え?僕からはきつちり取つたよね。しかもそこそこの額」

「お前は別だ。これで何回目だと思つてるんだ。お前に飯を作つたの」「

「覚えてない」

真鞘の言葉を受けてもなおも遠慮していた綺凜だが、真鞘たちが食べている料理が美味しそうと思う気持ちと、先ほどから自分を苦しめている空腹感に負けて、真鞘にお願いした。

「すみません、それでは……馳走になります」

「はいよ、それじゃあ取つてくるからちよつと待つてて」

「あ、私が運びます!!」

そうして2人は厨房へと向かい、アルフは1人となつて食事をつづけた。

(真鞘があんなふうに接するとはね。彼女にはいろいろとお世話をなりそうだ)

基本的に他人と自分との間に壁を作りがちな自分の親友の変化を、アルフは嬉しく感じた。

真鞘とアルフに加えて綺凛も含め、3人で食事を再開した。

「お、美味しいです!!本当に真鞘さんが作つたのですか!?」

「でしょう!!真鞘の料理はレパートリーも豊富だからね、毎日食べたいんだよ」

「こ、こんなに美味しいものを何種類も作れるんですか!?」

「そうだよ。もう僕はこの学園で真鞘の料理以外を口にするつもりはないよ。刀藤さんも僕の分と一緒に毎日作つてもらえば?」

「ふえつ!?そ、それは……確かにこんなにおいしいお料理を毎日食べさせてもらえるのは嬉しいのですが……」

「遠慮しなくても大丈夫だよ。1人分が2人分になつたところでそんなに変わらないから……多分」

ついさつきまでほぼ初対面だつたはずの2人の会話が盛り上がりしているのを、真鞘が呆れながら聞いていた。そして呆れているうちに何故か毎日2人分の食事を作らなければならぬことになつた。

「おいこらアル、いつ俺がお前に毎日飯作つてやるつて言つた?」「ええ!作つてくれないの!?」

「……何で作つてもらえると思つてた。俺にだつて忙しい日とかはあるんだから毎日は無理に決まつてるだろうが」「じゃあ、それ以外!!予定がない日だけでいいよ」

アルフは両手を合わせ頭を下げて真鞘に頼んだ。

「なんでお前はそんなに必死なんだよ…………はあ、分かつたよ。忙しいとき以外は作つてやる」

「ほんとに!?」

「そのかわり、俺の頼み事も極力聞いてくれよ」

「何でも聞くし何でもやるし、何でも協力するよ!!」

本当に何でもしてくれそうなアルフは、長年の夢が叶つたかのように歓喜した。

「綺凜もそれでいいか?」

「わ、私の分も作つてもらえるんですか?!」

「まあさつきアルが言つたみたいに、1人分増えたところでさほど影響はないからね。綺凜が食べたいなら作るよ」

「で、ではお願ひします!!……でも、女として少し悔しいです」

綺凜は最後、小声で真鞘に聞こえないように言つたみたいだが、他の星脈世代（ジエネステラ）よりも身体能力が高く聴力も良い真鞘は、それが聞こえてしまつた。

「なんなら料理、教えてやろうか?」

「え!?で、でも真鞘さんのお手を煩わせるのは……」

「別にいいさ、俺は料理を息抜き代わりにしてるところもあるからな。綺凜に料理を教えることが俺の負担になるつてことはない」

「で、では……よろしくお願ひします」

綺凜はとても嬉しそうにそう言つた。

果たしてそれは料理が覚えられることからなのか、真鞘と2人で過ごすことができる時間ができたからなのか、はたまたその両方なのか……アルフはそう考えながら、残りの料理に手を付けた。

――――――――――――――――――

夕食を食べ終えた後、真鞘は綺凜を女子寮まで送つていくことにした。

本当は他にもつと話したいことがお互いあつたはずなのだが、気づけば料理関係の話だけになつてしまつた。幸いにも、ル・モーリスから女子寮までは少し距離があるので、2人で少し話す時間はあつた。

「まあ話そうと思えば、どこかで座つて話すこともできるし、明日以降も時間は作れるけどな」

「そうですね」

お互い同じ学園に在籍しているのだから再び会うことは当然可能となる。故に2人は、必要最低限の気になることだけをお互い質問しあいながら女子寮まで歩いて行こうということになつた。

「真鞘さんはどうしてアスタリスクに来たんですか？」

「まあ別に特に理由があつたわけではないんだけどな」

「それじやあ望みがあつて来たわけではないんですね」

「そうだな、これまでも自分がやりたいことを自分がやりたいようにしてきた生活だつたし。綺凛は？何か望みがあつてきたのか？」

「私ですか？私は……父を助けるためです」

「誠二郎さんを？」

真鞘は綺凛とともに、綺凛の父である刀藤誠二郎とも面識があつた。

「はい、……父は今、罪人として収監されています。それを助けたいのです」

「……罪人？」

真鞘が知る限り、誠二郎が罪を犯すということは考えられないこと

だけだった。

「父は何も悪いことはしてません！ただ、私を助けようしてくれただけなのです」

「何があつたんだ？」

「……五年前、私が父といたお店に強盗が入りました。そして人質にされそうになつた私を助けようとして……父は、父は…不可抗力とはいえ、その人を殺めてしまつたのです」

ギリツと歯を噛みしめる音が聞こえてくるくらいに、その声には悔しさがにじんでいた。

「相手は星脈世代（ジエネスティラ）ではなかつたのか」

綺凛はこくりとうなづく。

それがどのような状況でも、相手がいかに凶悪な犯罪者でも、

星脈世代がそうではない人間を傷つけたということは、たとえそれが正当防衛だとしても罪にとわれてしまう。ましてや誠二郎のように相手を死亡させてしまえば、それは過剰防衛として厳しい判決が下される。

「強盗犯はわたしが**星脈世代**だと気づいていないようでした。もし気が付いていたとしたら、私を人質に選ぶことはなかつたでしようけど、私は刃物を突き付けられて……怖くて怖くて、何もできませんでした」

当時の綺凛は子どもであれ**星脈世代**は相応の力を持つ。とはいっても訓練を積んでいない限りは武器を持つた大人は十分脅威となる、無理もないだろう。

「そこを誠二郎さんが助けてくれたのか」

「はい……このままで父はあと数十年、出てこられません。ですので私は、その父を助けたいのです」

話をしながら歩いていた2人は、そこで女子寮の前に到着した。

「今日はありがとうございました。夕食までご馳走になつて」

「いいさ、俺も久しぶりに話せて楽しかつたよ」

真鞘はそう言いながら綺凛の頭を撫でた。

「……っ!! あ、あの、真鞘さん!!」

「お、おう? どうした?」

「そ、その……真鞘さんは普段どんなトレーニングをしてるのでしょうか?」

「トレーニングか……といつても俺がこの学園に来たのは昨日だからまだ決めてないんだよな。今日の朝はいつもやつてるように走り込みとかで体を動かしたな」

「ふむふむ」

見ると、綺凛は熱心にメモを取っていた。

「走り込みはどのくらいやつているのですか? それから……」

「綺凛もメニューは自分で決めてるのか?」

「はい、ですがやっぱり不安で……それに1人だと組太刀もできませんし」

「なら、俺とやるか?」

「えつ?」

よほど意外だったのか、綺凛は大きく目を見開いた。

「い、いいのですか?」

「まあ俺だって組太刀はしたいし、1人でやる鍛錬にも限界があるからな。綺凛さえ良ければ」

「そ、それは真鞘さんと、ふ、ふ、二人つきりで、ということ、ですか?」

「まあそうなるな。他に人がいれば、誘うけど」

真鞘の言葉に綺凛は複雑そうな表情を浮かべる。

「ん? どうした?」

「い、いえ。ええっと…そ、それじゃあお言葉に甘えて」

「今日はもう遅いし、詳しい時間と場所は後で連絡する」

「はい」

時間も遅くなつてきてるので、2人は連絡先を交換してひとまず解散することになった。

「じ、じやあ、また明日、よろしくお願ひします」

「ああ、お休み」

「お休みなさいです」

綺凛は直角になるくらいしつかりと頭を下げる、小走りで女子寮へと入つて行つた。真鞘はそれを見送つて、男子寮へと帰つて行つた。

その時の足取りは、2人とも軽いものだつた。

——真鞘、真鞘!!

誰かが自身の名前を呼ぶ。だが目の前は真っ暗で何も見えはしない、身体も動かない。

——おい、真鞘!! しつかりしろ!!

誰かの声は自分に呼びかけ続ける。けれども、それが誰の声かは分からない。

——俺の顔を見ろ!! 吞まれるな!!

真鞘はゆっくりと目を開いた。

そこは自分が普段過ごしていた我が家だつた。

そこに真鞘は立っていた。

そして——

周りには自分の家族が倒れていた。

どうしてこうなった。

どうして自分が立っている。

どうして周りに家族が倒れている。

どうして自分は血まみれで立っている。

どうして……自分は刀を持っている。

「誰か……」

「……真鞘」

ハツとして振り向けば、そこには血まみれの——

——

「最悪な夢見たな」

真鞘が目を覚ますと、そこは一昨日から過ごし始めた自室だつた。

今日の朝は、昨日約束した通り綺凛と一緒にトレーニングをすることになつてゐる。時計で現在の時刻を確認すると、設定した目覚ましが鳴る少し前だつた。隣のベットを見るとアルフはまだ眠つてゐるが、今からもう一度寝るつもりもなく、軽く顔を洗つてさっぱりすると、身支度を整えて真鞘は部屋を出た。

約束の時間より少し早いが、すでに待ち合わせ場所にはトレーニングウェア姿の綺凛が到着していた。

「悪い綺凛、待つたか」

「いえ大丈夫です。私も先ほど着いたばかりですし、まだ約束の時間より早いです。おはようございます、真鞘さん」

「おお、おはよう。じゃあ行こうか」

合流した2人はまず、アスタリスクの外周を回るコースを走つた後、綺凛の所有するトレーニングルームに移動した。

「今日はこんなものを持ってきてみた」

真鞘は言いながら、自身の鞄から木製の刀を日本取り出した。

「それは、木刀ですか」

「そう、これでちょっと模擬戦やつてみないか?」

「とか言わなければよかつた」

「朝からどんなトレーニングをしたらそんなに疲れるんだよ……」

現在真鞘は教室の自身の机の上にうつ伏せでぐつたりとしていた。

こうなつた原因は朝に綺凛と行つた、木刀を使つた模擬戦にあつた。綺凛の現在の実力を知るという目的で提案した真鞘だつたが、綺

凜の実力は真鞘の予想以上のものであった。

「まあ序列一位なんだから当たり前なんだけどさ」

綺凛は真鞘に自分の力を見てもらいたいという思いから初めから本気で戦い、真鞘も真鞘で相手の綺凛が久しぶりに純粹な剣術だけで勝負をしてくるタイプということもあってテンションが上がっていました。その結果、もはや模擬戦と言えるレベルではなくなったトレーニングになってしまった。

「使っていたのが木刀じやなかつたら全身傷だらけだつたかもな、お互い」

「もうそれはトレーニングとは言わないし、模擬戦ではないよ。ちなみにどつちが勝つたの？」

「俺が勝つた、ギリギリだつたけどな」

最終的には綺凛が使っていた木刀を真鞘が真つ二つ折ったことによつて模擬戦は終了となり、そのまま早朝トレーニングも終わりとなつた。

「それで、どうだつた？ 疾風迅雷の実力は」

「正直、予想以上だつた。なめていたわけではないんだけど最初の時間帯はこつちが押された」

「それは、また……僕も模擬戦してみたいな」

「やめろ、それこそ怪我人が出る」

真鞘とアルフが話していると、綾斗と夜吹が教室内に入ってきた。

「おはよう、2人とも……つて真鞘どうしたの？」

「おはよう綾斗、ああ真鞘はほつといて良いよ。自業自得だから」

「うるせえアル……まあその通りだから返す言葉はない。おはよう、2人とも」

「あ、夜吹もいたんだ」

「アルフ、お前ひでえな」

昨日と同じ4人で会話をしていると、綾斗は隣の席に座つていたユリスにも声をかけた。

「おはよう、ユリス」

「……ああ、おはよう」

その瞬間、それまで騒がしかつたクラス内の喧騒がピシッと収まつた。

「おい、今の聞いたか……？」

「……あ、あのお姫様が挨拶を返しただと……!？」

「聞き間違ijiやないよね……?」

「あいつ、一体どんな魔法を使いやがつた……!」

「いやまた、そもそもあれは本物なのか……?」

一転してざわめきだしたクラスメイト達。この反応は駄目だろうと真鞘が思つていたら、案の定ユリスは机をバンと叩いて立ち上がつた。

「し、失敬だな貴様ら！私だつて挨拶くらい返す！」

当然のユリスの反応に真鞘は苦笑していたが、そこでふとユリスとは反対側の綾斗の隣の席、昨日は空席になつていた綾斗の左隣の席が埋まつていることに気付いた。その席では、青みがかつた綺麗な髪の女の子が、先ほどまでの真鞘と同じような机に突つ伏すような態勢で寝息を立てていた。

真鞘と綾斗が挨拶をしようかと悩んでいると、タイミングよくその少女がむくりと顔を上げた。

「おはよう、お隣さん。俺は昨日この学園に転入してきた天霧……」

先に挨拶を行つた綾斗だつたが、その言葉は最後まで口にすることができなかつた。その少女の顔を見た途端、ぽかんとした顔のまま固まつてしまつた。真鞘も綾斗と同じように固まつている。

「さ、紗夜……？」

「……まじかよ」

「……」

当の少女は無表情に真鞘と綾斗の顔を交互に見ていたが、やがて小さく首をかしげてぼそりとつぶやいた。

「……綾斗と……誰？」

「えええつ！な、なんで紗夜がここに!?」

「おいらちよつと待て」

間違いなく、その少女は沙々宮紗夜ささみやさやであつた。

驚きのあまり立ちつくす2人の前から、夜吹が身を乗り出して聞いてきた。

「なんだなんだ。お前ら知り合いなのか？」

「ああ、うん…古い友人というか、まあいわゆる幼馴染つてやつかな」

「俺も一応は顔なじみだつたはずなんだが……」

「……あ、真鞘だ」

「…………」

綾斗からかなり遅れて紗夜に認識された真鞘は、言葉なく自分の席に座った。

「幼馴染つていうんなら、どうしてうちの生徒だつて知らなかつたんだい？」

「いや、幼馴染つて言つても、紗夜が海外に引っ越して以来だから……かれこれ6年ぶりぐらいになるとと思う」

「へえ……そのわりに、こつちの反応は薄いようだぞ」

「それでも本人は結構驚いてるぜ……よな、綾斗？」

「うん……きっと」

「本当か？」

「…………うん、ちょおびっくり」

「…………いや、全然そうは見えないけどな」

ピクリとも眉を動かさない紗夜に夜吹は力なくツッコミを入れた。

「それにしても変わらないね、紗夜は。なんか昔のままっていうか……」

すると今度は首をふるふると横に振つた。

「そんなことはない、ちゃんと背も伸びた」

「どこがだよ」

真鞘はそう言いながら紗夜を見る。

どう見ても、最後に別れた時とほとんど同じ身長に見える。

それは綾斗も同じようで、真鞘と同じような反応をしている。

「俺もあんまり変わつてないよう思うけど……」

「違う、2人が大きくなり過ぎ……でも大丈夫。私の予想だと来年く

らいには今の綾斗くらいにはなつてる」

「いや、さすがに1年でそんなには伸びないでしょ」

紗夜のとんでも発言にたまらずアルフが突っ込みを入れる。

「アルフうるさい、チビは黙つてろ」

「紗夜には言われたくないね…」

アルフは同年代の男子の平均身長と比べると少し小さい。だが、少し小さい程度であるため、チビ呼ばわりされるほどの低身長でもない。

「別に身長が低くとも生きていいけるし、煌式武装使いこなせるからそちら辺のデカい奴とも普通に戦えるし」

「それには同意。小さくても関係ない。うん、アルフはいいこと言う」

紗夜はチビ呼ばわりから一転、今度はアルフに向かつてぐつとサムズアップした。

「お前らつて結構仲良いよな」

「へえ、そうなの？」

そんな二人のやり取りを見ていた夜吹はそうつぶやき、それを聞いた真鞘はアルフに問い合わせた。

「まあ仲がいいというか、話が合うんだよね」

「なんか意外だな」

「共通点が多いんだよ。重火器型の煌式武装使つてるところとか、その開発者がちょっと変わってる人とか…」

アルフに言われて真鞘は、紗夜の煌式武装を開発した紗夜の父親と、自分たちの使つてる煌式武装を開発した人物を思い出した。

「……ああ言いたいことは分かった」

確かに似ている。

作るもののがぶつとんでいるところとか、マッドサイエンティストのところとか……

そういうえば、あの天災兎は何をしているのだろうか？

真鞘は紗夜に銃口を押し当てられている夜吹を見ながら、ふと思つた。

放課後、真鞘達は話しながら帰る準備をしていた。

「紗夜の親父さんは相変わらずだな」

「ほんとにそう。もうちょっと大人しくしていてほしい」

そこへ、先ほどまで姿が見えなかつたユリスがこちらへと話しかけた。

「あーこほん、そろそろ準備はいいか?」

「ああユリス、じゃあよろしく頼むね」

「し、仕方がない。約束は約束だからな」

真鞘、アルフ、紗夜は事情を知らないために首をかしげる。夜吹は、新聞部の仕事があるとのことでこの場にはいない。

「約束つて?」

「今日はユリスに学園内を案内してもらうことになつてているんだ」

「リースフェルトに?なぜ?」

綾斗の答えに紗夜は疑問を持つたが、真鞘は大体の予想がついた。

「どうぞ、昨日の決闘の時の礼だろ」

真鞘の言葉に、綾斗とユリスは驚いた。

「た、確かにそうだが…よく分かつたな」

「綾斗のことだ、どうぞ頼むことなんか思いつかなくて学園内を案内してくれとでも言われたんだろう」

「……」

綾斗は見事にいい当てられ返す言葉もなく、アルフは納得した。しかし、紗夜は新たな疑問が出てきた。

「リースフェルトは綾斗と決闘をしたのか?」

「…そうだが?」

「その結果は?」

「途中で邪魔が入つてな、勝負がつかないまま終了した」

「…そうか」

紗夜はどこか納得いかないといった表情であつたが、それ以上は何も言わなかつた。

「さあ行くぞ」

「ああ。じゃあみんな、また明日」

そうして、2人が教室から出ようとした時だつた。

「あら、でしたら私のほうが適任ということになりますね」

「おわっ！」

いつの間にやつてきたのか、クローディアが後ろから綾斗に抱き着いた。それを見たユリスの顔は険しくなる。

「ユリスは中等部三年からの転入です。一年から在籍している私のほうが、この学園の地理は細部まで理解しています」

今年に入学したアルフからこの学園を案内してもらつた真鞘はどうなるのだろうか？

「ですから綾斗の案内は私が…」

「却下だ」

「ちよつ、クローディア当たつてる」

クローディアの提案にユリスは即答した。綾斗はクローディアに胸を背中に当てられてあたふたしている。

「ふむ、残念です。では用件だけ済ませて帰ることにします」

クローディアは名残惜しそうに離れると、綾斗に向き合つて書類の束を差し出した。

「先日申し上げました純星煌式武装^{オーガルクス}の選定及び適合率検査を明日行います。この書類に目を通していただいて、問題がないようでしたらご署名をお願いします」

「あ、そのことか。分かつたよ……って、結構量多いんだね」
綾斗が受け取った書類はざつと見て10枚ほどあった。

「あくまで統合企業財体の資産ですからね。まあ形式だけですのでお気になさらず、さらさら~っと流してしまつて結構ですよ」

「俺の時にはそんなこと一言も言わなかつたよな。しかも綾斗より量多かつたし」

「真鞘の時は違う書類でしたから。あちらは重要書類になりますの

で」

「……」

「ドンマイ真鞘」

まあ確かに重要な内容ではあったが、真鞘は納得できなかつた。しかし、それをクローディアに言つたところでどうにもならない。頃垂れる真鞘の肩にアルフは手を置いて一言言つて慰めた。

「……そんなものを生徒会長がわざわざ持つてくるとは、生徒会もよほど暇らしいな」

「本当は生徒会副会長に頼もうと思つていたんですけど……どこで油を売つてるのかなかなかこちらに来ないので」

そういうつてクローディアはアルフの方を見る。その瞬間、アルフは真鞘の後ろに隠れるも自分の携帯端末を見て顔を真っ青にしていた。そこには、クローディアからの着信が数件入つていた。

「えつと、ごめん、気づかなかつた」

「……はあ、まあいいでしよう。今回は許します」

その瞬間、アルフは助かつたと言わんばかりに脱力した。それと同時にアルフの携帯端末に着信が入つた。

「ちよつとごめん」

アルフは一言断りを入れてから通話をしに、廊下へと出ていった。「前から思つてたんだけど、ユリスとクローディアって友達なの？」

「はい、そうですよ」

「断じて違う！」

綾斗の質問に、2人は全く正反対の答えを返した。それを聞いた綾斗は困惑した顔で首を傾げ、真鞘は吹き出した。紗夜は相も変わらず無表情のままだつた。

「あらあら、冷たいお答えですね」

「ウイーンのオペラ座^{オペラ座}舞踏会で何度も顔を合わせた程度の昔なじみで、それ以上でも以下でもない。いいから用が済んだのならとつと帰るがいい」

「ふふつ、ごきげんよう。ですが、明日は私が綾斗を独り占めさせていただきますので、悪しからず」

クローディアは一礼して、教室を出ていき、すれ違いにアルフが戻ってきた。

「お帰りアルフ、誰から連絡？」

「ああうん、ちょっとね……、ねえ真鞘。今日この後空いてる？」

「今か？別に特に何もないが……」

この時真鞘は、何故かとてつもなく嫌な予感がした。

「おいアルフ、さつきの着信、まさか……」

「うん、そのまさかだよ。」

束さんから連絡がきた、『今からそつち行くね!!』……だつてさ』
2人はため息を吐き、頭を抱えた。

ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー・ー

篠ノ之 束一

真鞘とアルフの使う煌式武装^{ル'クス}を開発した人物であり、一時期真鞘とアルフと行動を共にしていた。彼女を一言で表せばと問われると、真鞘は『狂った兎』と答え、アルフは『頭のイカれた天災発明家』と答える。

綾斗とユリスが教室から出ていった後、残った3人はアルフの所有するトレーニングルームへと移動していた。

『まさかアルフがこここの序列3位だとはなあ』

アルフがトレーニングルームを所有しているのは、冒頭の十二人としての特権を使用してのものであるということを、真鞘は移動前に聞かされた。

『まあこの学園の実力が知りたかつたから入学したての頃はよく決闘したね』

そのどれもが1分も経たずにアルフの勝利で終了してからは誰もアルフの決闘の申請を受諾しなくなつたが、その後に行われた公式序列戦で序列3位となつた。

『決闘と言えば、さつきの話。真鞘、綾斗がリースフェルトと決闘した

「という話は本当か？」

それまで黙つていた紗夜が、決闘という言葉で思い出した質問を真鞘に問いかけた。

教室から移動する際、東がやつてくる理由を考えたときに、真っ先に思い当たったのが煌式武装のメンテナンスであった。

真鞘とアルフの使う煌式武装のメンテナンスは不定期に東が行っている。今回のように唐突に連絡をよこして唐突に現れてメンテナンスを行つて帰つていく。

そして、その煌式武装のメンテナンスという要件に紗夜が食いついた。アルフと似ている煌式武装を使う紗夜はその煌式武装を開発し、メンテナンスを行つている東にも興味を持ったということだつた。東が極度の人見知り、というよりも極端に他人に興味を示さない人物であるということで、真鞘とアルフは紗夜を連れて行くかどうか悩んだが、東と紗夜の父親が顔見知り、というよりもかなり仲が良いといふことを思い出して、まあ大丈夫であろうという2人の判断で紗夜も一緒にアルフのトレーニングルームへ向かうことになつた。

「ああ、途中で中止になつたけど確かに決闘していた」

「……おかしい、綾斗の実力ならリースフェルト相手なら余裕なはず」

「そうなの？」

紗夜の言葉にアルフは驚き、聞き返す。

「確かに、昔の綾斗のままだつたら勝つてたと思うが……」

「何か理由があるのかい？」

「まあな……まだ確証はないが、おそらく綾斗は何らかの方法で力を封印されてるんだろう。魔術師か魔女の能力だとは思うが……」

「なるほど、それなら納得」

「でもどうしてそんなことを……」

「そこまでは分からねえよ。本人から聞くしかないだろう（まあそんなことを出来る人で思い当たるのは1人しかいないけどな）

「そういうえば、東さんはどこに来るんだ？」

「それが、分からぬんだよ……用件だけ言つてすぐに通話切られちやつたし…」

「アルフ、あれ何？」

トレーニングルームまで後少しという時、紗夜がトレーニングルームへと続く一本道の隅の、その地面から伸びている二本のうさ耳を指さしていた。

— · · · · ·

2人か見上はが空から 穿丸として口ケットが降つてきが……人参考型の口ケットが。そしてその中から、何食わぬ顔をした束が姿を表した。

やあやあ久しぶりだねー、まーくん!!あーくん!!

「ミルク」

はんといつせなかに急力の才

「ところで、そつちの子はもしかしなくてもそりくんの娘かな??」
東が会瀬し
東華たちはソシタツの口へと移動した

「どうして、その子はもしかしながら、そーくんの娘かな?」
「ただ、よく分かつたね」

「それはよかつたよ」
単に会えるなんて!! 2人ともナイスだよ!!

真鞘とアルフに向かつてサムズアップする束に対して2人は苦笑いを返しながら、ひとまずは束が上機嫌なことに安堵した。この人物が不機嫌になると面倒臭くなるということを、2人は熟知していた。

「私も父から話を聞いてあなたに会つてみたかった。あなたの作る
煌式武装には興味があつた」

「それは嬉しいねえ。私もそーくんが作った煌式武装をさーちゃんが
どんな感じで使つてゐるのかは見てみたかったんだよ。後で使つて見
せてみてよ。私の作つた煌式武装も使つてみていいからさ」

「それは構わない、むしろ大歓迎」

「あ、私のことは束さんでも束姉さんでも束でもなんでも好きな風に
読んでくれていいから」

「分かつた、束」

この2人が会つて数分もしないうちにかなり仲良くなつてゐる状
況に、真鞘とアルフは安堵した。